第43回大学祭　7月8日から3日間開催

今年の大学祭は夏祭り

メインテーマは存在の証明

大学祭の準備に当たって

学生委員会副委員長　西村清巳

第四十三回広島大学大学祭が七月八日(金)～七月十日(日)まで開かれる。西条キャンパスにおける二度目の大学祭である。

開催期日については、昨年から鋭意検討を続けてきた。今年はアジア大会が十月二日から十六日まで、広島市を中心に開催され、多くの学生がボランティアとして参加するため、事前の準備ができないという理由で、夏に大学祭を行うということになった。

大学祭実行委員会が設定した今年のテーマは、「存在の証明」である。少し重いテーマだが、団結と力を証明しようという意気込みがうかがわれる。

学生委員会は、昨年、西条キャンパスにふさわしい大学祭のあり方について検討した。その趣旨と内容は、昨年のフォーラム三号の紙面に上田良文学生委員会副委員長によって掲載された。今年も昨年と同じ考えで取り組むつもりである。

一・学生の課外活動、教職員の文化・余暇活動の成果を学内・学外に発表する。

二・学生・教職員・市民が各種のイベントへの参加をとおして、相互の親睦を深める。

三・教育・研究施設や成果を地域社会に開放して、地域の理解を深め、大学機能の活性化に資する。

以上の三つの基本方針が踏襲されることになる。

昨年の反省をすれば、理想が高くてやや現実が伴わなかったきらいはあるが、全構成員が参加する大学祭に向けて一歩踏み出したことは評価できる。

運営面では、学生の企画と学部・教職員の企画が並列するような形になって統一を欠いたという批判を受けた。大学祭実行委員会と学部・教職員組織の連絡が不十分であったことも事実であるが、初めての取り組みで、やむを得ないところもあった。新しい理想に向かって祭りを演出するためには時間がかかるということであろう。

一部マスコミの批判に対しては、「人の心人知らず」の思いである。「大学祭は全構成員の祭典である」という精神にいつわりはなかったはずである。

今年は、昨年の反省に立ち、学生企画、学部・教職員企画、あるいは市民の企画が連動してまとまりのある大学祭のイメージを創り出したいと考えている。それぞれの組織が別々に企画することはやむを得ないとしても、双方の時間的空間的連動はつけたいものである。西条キャンパスは今なお建設途上である。大学祭の会場も年々変化する。これらの物理的条件も新しい大学祭創造の流れの中に組み込んでねばり強く努力して行きたいものである。

全構成員が参加する大学祭を構想して二度目の大学祭である。新しい時代の新しい大学祭を定着させるために、積極的な参加をお願いしたい。今年はまた夏祭りという違った要素が加わって、対応のむずかしさはあるが、変化に対応する機動力を持つのも新しい大学の能力であるので、よろしくお願いしたいと思う。

（にしむら・きよみ）

(注)六月十六日から学生部長に就任

大学祭実行委員会から

委員長　松崎吉伸

第四十三回大学祭を七月八、九、十日の三日間開催することになりました。今年の大学祭では、西第二福利会館前の円形広場に、特設〝ひらいステージ〟を設置します。また、総合科学部K棟内で展示などのさまざまな企画や、講義棟前広場での模擬店やDJブースなども予定しております。

さて、広島大学大学祭は、第一回目が開催されてから毎年欠かすことなく開催されてきました。その中で、大学祭の本質についても考えられてきました。

大学祭とは、学内構成員の、自由で、自主的な、表現と創造の場です。祭の自主性ということから、大学祭の運営もまた自主的な運営によらなければなりません。もしこれらのことが守られないのなら、大学祭を開催する意義はなくなってしまうでしょう。

大学祭をさらに意義あるものにしようとするならば、日頃の大学構成員の活動状況を考えることから始まります。なぜなら、大学祭を手がけるものが大学構成員である以上、大学祭もまた、学内や社会の状況と無関係ではありません。むしろ、学内や社会の状況が、大学祭に投影されています。

現在、広島大学には、全学が交流できるような場が少なく、地域のかたがたと触れ合う場もほとんどありません。そのような中で、大学祭に三つの目的を考えることができます。

一・大学構成員の表現と創造の場であること。

二・大学構成員の交流の場であること。

三・地域のかたがたとのコミュニケーションの場であること。

今回の大学祭のテーマとして、「存在の証明―さる山の理想と現実―」を掲げました。テーマ解説は別の機会に譲りますが、大学祭を通して何か感じていただければ、と思っています。

前記の三つの目的を達成して、さらに意義のある大学祭になるように努力しておりますので、ぜひご来場くださいますようお願いいたします。

（まつざき・よしのぶ）